

“賛美”の音楽心理学的考察・その2

“賛美”の歌詞に対するクリスチャンの自発的な選択的聴取

後 藤 靖 宏

“賛美”の音楽心理学的考察・その2 “賛美”の歌詞に対するクリスチャンの自発的な選択的聴取

後藤 靖 宏

Yasuhiro GOTO

目次

1. はじめに
2. 方法
3. 結果
4. 考察
5. 謝辞
6. 引用文献

[Abstract]

A Study of Hymns from the Standpoint of the Psychology of Music, Part 2: Spontaneous Selective Listening to Hymn Lyrics by Christians

This study investigated whether Christians spontaneously pay selective attention to the lyrics of hymns. In this psychological experiment, Christians and non-Christians were asked to recall the lyrics of either hymns or children's songs. No instructions, for example, "You must listen to the lyrics of the song," were given to the participants. The results were that a significant difference was observed in the ability to recall the lyrics of hymns between Christians and non-Christians. On the other hand, there was no difference between them in their ability to recall the lyrics of children's songs. These results reflect a difference in the level of processing song lyrics between them. Christians could understand the semantic content of hymn lyrics through a deeply cognitive process; whereas, non-Christians just processed song lyrics at a superficial level, that is, they processed them phonologically but could not understand the meanings of the lyrics. These results show that it is possible that Christians spontaneously pay attention to the lyrics of hymns because they completely understand the importance of lyrics.

はじめに

本研究の目的は、“賛美”の聴取時に、クリスチャンが“賛美”の歌詞に自発的な選択的注意を向けているかを調べることである。

キリスト教では、礼拝や集会などにおいて、「賛美歌」と呼ばれる歌を歌う。この「賛美歌」は、神を誉め讃える行為そのものであり、単に“賛美”と称されることも多い。こうした慣例に従い、本研究においては、“賛美”と「賛美歌」を同義として扱う。

三谷(1994)によれば、“賛美”とは、「聖霊を求め、神に対して応答し、神から人へ与

えられた恵みへの感謝を表すために用いられるもの」であるという。また、横坂(1993)は、“賛美”は「聖書の御言葉から靈感を得て作られるものであり、その歌詞全体に統一感を与える形式が重要となってくる」と主張している。これらの主張にみられるように、“賛美”については、主観的あるいは観念的に多様な評価がなされている。

一方、“賛美”に対して客観的・科学的に検討を加えた研究は決して多くはない。後藤(2015)は、音楽心理学的な観点からクリスチャンとノンクリスチャンが“賛美”に対して抱く印象の構造を明らかにするために調査

キーワード：“賛美”，歌詞，自発的注意，クリスチャン，親近性

Key words : Hymns, Lyrics, Selective Attention, Christians, Familiarity

を行った。後藤 (2015) では、日常的に教会に通って“賛美”に触れており、さらに“賛美”がキリスト教の神を誉め讃える歌であると理解している者をクリスチャンと定義し、実際に“賛美”を聴取させてその印象を評価させた。その結果、“賛美”に対する印象を説明する因子として、平穩、快活、莊嚴、寂寞、および単純の 5 因子が抽出された。これは、“賛美”がおだやかな要素や明るく生き生きとした要素、あるいはおごそかな要素など複数の異なる側面を持っており、“賛美”特有の聴取印象をも含んだ、様々な要素が感得されたことの現れであるといえる。また、クリスチャンとノンクリスチャンとでは、各因子に対する評価が同じではないという可能性を示す結果も得られた。

さて、後藤 (2015) は、“賛美”において歌詞が極めて重要な役割を果たすと主張している。後藤 (2015) によれば、“賛美”の本質は神を誉め讃えることであり、そうした条件を満たす楽曲は基本的に全て“賛美”であるという。換言すれば、神を誉め讃えるという条件を満たしている楽曲は、どのような曲調であっても、あるいはどのような楽器で演奏されていようとも、基本的に全て“賛美”であるということになる。こうした考え方に基づくと、“賛美”において、「メロディ」や「楽器」、あるいは「歌唱」という行為はあくまでも付加的な要素に過ぎず、本質的に重要なのは神を讃える思いを言語的に表現する歌詞であるといえるであろう。

では、“賛美”の本質である歌詞をクリスチャンとノンクリスチャンは同じように認知しているのであろうか。先に述べたように、クリスチャンとノンクリスチャンとでは、“賛美”への親近性が異なっており、こうした違いによって“賛美”への聴取印象が異なることが明らかになっている (後藤, 2015)。このことから推測すると、“賛美”の本質的な要素である歌詞に対しても、両者の間には知

覚や注意、記憶あるいは解釈といった認知的側面に違いがあると考えられる。

音楽の聴取に関しては、これまで様々な側面から研究が行われてきた。特に、音楽熟達者と非熟達者の聴取能力の差異については、リズムや音高知覚 (後藤, 2008)、旋律記憶 (大浦・波多野, 1986, 1994) などの側面から研究が行われている。後藤 (2008) は、メロディを構成する要素であるリズムと音高をそれぞれ選択的に聴取する能力と音楽熟達度との関係を明らかにする実験を行った。その結果、音高処理能力は、非熟達者に比べて、熟達者の方が優れていることが明らかになった。また、大浦・波多野 (1986) は、音楽経験のある大学生および小学 4 年生は、非経験者に比べて旋律の記憶成績が良いことを明らかにした。これは、聴覚情報の記憶能力の高さによるものではなく、特定の様式の音楽に習熟し、多くの知識を持っているためであると考察されている。

このように、音楽の認知能力や旋律記憶能力などは、音楽の熟達度によって違いがみられることが明らかになっている。水戸・大浦 (1996) によれば、音楽能力は個人の訓練や教育といった音楽経験の違いによって異なるものであり、能力の発達過程や身につく能力も異なってくるものであるという。この水戸・大浦 (1996) の主張に従い、後藤 (2010) は楽器経験の異なる者では楽器の演奏に対する注意の対象が異なるのかを検討した。具体的には、トランペット、ホルンおよびチューバという 3 つの楽器の音色で構成された楽曲を用いて、ホルン奏者の自発的な選択的聴取について実験を行った。その結果、ホルン奏者では、ホルンの音に注意を向けるような教示はしていなかったにも関わらず、ホルン旋律の変化に対する判断の成績が高かった。このことは、楽器演奏者は自身の経験してきた楽器の音に自発的に注意を払っており、そのため、中音域で比較的目的立たないホルンの音色

であっても旋律の変化に気づくことができることを示している。

前述したように、クリスチャンは日常的に“賛美”に触れる機会が多く、従って“賛美”という特定の音楽に習熟しているのに対し、ノンクリスチャンは“賛美”に触れる機会はほとんどないために、クリスチャンと比べると“賛美”に対する習熟度合は低いと考えられる。“賛美”の歌詞と後藤（2010）で扱われたホルンの音色とでは、言語情報と非言語情報という違いがあるものの、注意という観点から考えると、“賛美”の習熟度合が違うクリスチャンとノンクリスチャンとでは歌詞に対する自発的な選択的注意には違いがあることが予想される。

これらのことから、本研究では、“賛美”の聴取時にクリスチャンが“賛美”の歌詞に自発的な選択的注意を向けているのかを明らかにすることを目的として実験を行った。具体的には、歌詞の再生に関する教示を一切与えずに“賛美”を聴取させ、その後歌詞の再生課題を課した。その際、単に聴覚情報の記憶能力の高さが原因ではないことを示すために、比較対象として童謡・唱歌の歌詞の記憶成績も調べた。これにより、楽曲の歌詞に自発的に選択的注意を向けているかどうかを明らかにすることができる。

本研究の仮説は以下の通りである。“賛美”においては、クリスチャンの歌詞の再生成績はノンクリスチャンに比べて高くなるである

う。なぜなら、クリスチャンは、“賛美”の歌詞にも自発的に選択的注意を向けていると考えられるためである。一方、童謡・唱歌においては、クリスチャンとノンクリスチャンの歌詞の再生成績は異ならないであろう。なお、クリスチャンは、偶発的学習であっても、“賛美”の歌詞の再生成績がノンクリスチャンと比べて高くなるであろう。

方法

被験者 クリスチャン20名（男性3名，女性17名，平均年齢21.3歳）とノンクリスチャン20名（男性1名，女性19名，平均年齢20.3歳）の計40名であった。クリスチャンは、後藤（2015）と同様に、日常的に教会に通って“賛美”に触れており、さらに“賛美”がキリスト教の神を誉め讃える歌であると理解している者と定義し、それ以外の者をノンクリスチャンとした。

実験計画 2要因2水準ずつの混合計画を用いた。第1要因は聴取者要因であり、クリスチャン条件とノンクリスチャン条件の2水準であった。第2要因は音楽要因であり、“賛美”条件と童謡・唱歌条件の2水準であった。第1要因は被験者間要因，第2要因は被験者内要因とした。

材料 “賛美”5曲（表1），童謡・唱歌5曲（表2）を使用した。“賛美”は、後藤（2015）を参考に、歌詞がついており、その歌詞が過

表1. 本調査で使用した“賛美”

曲名	曲の長さ	収録アルバム	編
御霊に歩み	3分7秒	MAJESTY	ミクタムレコード
油を断やすことなく	2分18秒	HALLELUJAH	ミクタムレコード
愛します救い主	2分50秒	GLORY! GLORY!	ミクタムレコード
心を燃やしてさあ輝け	3分8秒	HALLELUJAH	ミクタムレコード
進めイエスの勇士	3分45秒	HALLELUJAH	ミクタムレコード

表2. 本調査で使用した童謡・唱歌

曲名	曲の長さ	収録アルバム	編
赤い帽子白い帽子	1分48秒	よいこのための童謡集1	アメリカーナ・ソングス
金魚のひるね	2分1秒	よいこのための童謡集2	アメリカーナ・ソングス
赤い花白い花	2分4秒	ふるさとをうたおう日本の歌	ワンダーランドレコード
青い眼の人形	2分17秒	よいこのための童謡集1	アメリカーナ・ソングス
里の秋	3分14秒	みんなであうたう童謡・唱歌1	ポニーキャニオン

度に繰り返されず、さらに既知度が低いと考えられる曲を実験者が選出した。童謡・唱歌は、本実験に参加しない大学生 6 名に対し、実験者が選出した既知度の低いと考えられる童謡・唱歌を 10 曲を聴取させて、全員が未知であった 5 曲を選曲した。楽曲の長さは 1 分 48 秒から 3 分 45 秒であった。楽曲の歌詞は、8 フレーズから 18 フレーズで構成されており、過度の繰り返しのないものであった。

装置 mp3 プレーヤー (Sony NW-S644)、アンプ内蔵スピーカー (Sony SRS-Z1) を用いて楽曲を再生した。

手続き 実験は、騒音のない静かな部屋で、個別に行った。回答はすべて回答用紙に行わせた。はじめに、回答用紙の表紙に年齢、性別を記入させ、音楽の聴取に関する研究であることを説明した。また、楽曲は全部で 6 曲あり、その曲ごとに印象の評定を行い、そのあとに質問項目に回答するよう指示を与えた。さらに、評定は楽曲を聴取し終わってから開始するよう指示した。

まず、印象の評定は、「ゆったりした」や「気高い」など 28 個の形容詞を用いて 7 件法 (1. 全く当てはまらない～ 7. 非常に当てはまる) で回答させた。この印象評定課題は、楽曲聴取時に意図的学習をさせないために行わせたフィラー課題であり、以後の分析対象とはしなかった。

次に、質問項目は、歌詞を再生させる項目と、その他のフィラー項目によって構成されていた。歌詞の再生をさせる項目では、「歌われていた歌詞をできる限り正確に書いてください。曖昧な部分も、思い出せるだけ記述してください」という指示を回答用紙に記載した。この指示は、口頭では一切伝えなかった。

最後に、手順について不明な点がないかどうかを確認し、本試行を行った。

本試行では、楽曲を流す直前に、何曲目であるかを被験者に伝えた。また、回答は被験

者のペースで行わせた。なお、楽曲は 1 曲目が必ず“賛美”になるように呈示した。その理由は、“賛美”を 1 曲目に聴取させることにより、歌詞の再生をするという指示を一切与えられていない状態で楽曲を聴取できるようにするためである。これにより、本研究の目的である歌詞に対する自発的な選択的注意の有無を調べることができると考えられる¹⁾。

結果

まず、自由記述で回答させたそれぞれの楽曲の歌詞の採点を行い、再生率を算出し分析対象とした。その他の項目は分析の対象とはしなかった。

歌詞の採点を行うにあたり、実験者がそれぞれの楽曲の歌詞を 8～18 フレーズに区切り、採点基準を作成した。その採点基準に基づき、1 フレーズを正確に再生できていれば 1 点、1 フレーズの一部のみ間違っているものを 0.5 点、全く再生できていなければ 0 点として採点を行い、被験者ごとに再生率の平均を算出した。その結果、再生率が全体の 2 割程度と低く、いわゆるフロア効果 (floor effect) によって統計的な検定が難しくなることが懸念された。そこで採点基準を緩め、歌詞を一字一句正確に再生できていなくても、歌われている内容と意味が一致していれば再生されたとみなすこととした。実験者と本実験に参加していない者の計 2 名によって採点を行い、その平均値を再生率とした。

こうして得られた再生率を従属変数とし、聴取者要因と音楽要因を独立変数として、繰り返しのある分散分析を行った。その結果、音楽要因の主効果がみられた ($F [1, 38] = 7.10, p < .05$)。また、聴取者要因の主効果は有意傾向であった ($F [1, 38] = 3.11, p = .08$)。一方、聴取者要因と音楽要因の交互作用は観察されなかった ($F [1, 38] = 0.99, n.s.$)。クリスチャンとノンクリスチャンの歌詞の再生

率を図1に示す。

以上のように、分散分析の結果、聴取者要因と音楽要因の交互作用はみられなかった。しかし、この結果は、純粋に偶発的な学習をしたと考えられる1曲目の“賛美”の再生成績と、意図的な学習をした可能性を含む2曲目以降の歌の再生成績という、異なる性格の成績が混じってしまっている。仮説でも述べたように、本研究の目的は、クリスチャンが“賛美”の歌詞に対して自発的な選択的注意を向けているかどうかということ进行调查することであった。そこで、Bonferroni法による単純主効果検定を行い、条件間に差があるかどうかを調べた。分析の結果、クリスチャン条件においては、“賛美”条件 ($M=24.53$) と童謡・唱歌条件 ($M=28.45$) の間に差はみられなかった。一方、ノンクリスチャン条件においては、“賛美”条件 ($M=17.68$) と童謡・唱歌条件 ($M=26.28$) の間に有意な差がみられた ($p<.05$)。また、“賛美”条件においては、クリスチャン条件とノンクリスチャン条件の間に有意な差がみられた ($p<.01$)。しかし、童謡・唱歌条件においては、クリスチャン条件とノンクリスチャン条件の間に差はみられなかった。

なお、“賛美”の歌詞に対して、クリスチャンが自発的に注意を向けていたのかについて、より厳密に検討するために、1曲目の“賛美”のみの再生率を従属変数とし、聴取者要因を独立変数として、対応のないt検定を

行ったところ、クリスチャン条件 ($M=18.05$) とノンクリスチャン条件 ($M=12.05$) の間に差はみられなかった ($t[38]=1.44, n.s.$)。クリスチャンとノンクリスチャンの“賛美”の歌詞の再生率を図2に示す。また、童謡・唱歌の再生率を従属変数として、聴取者要因を独立変数として対応のないt検定を行ったところ、クリスチャン条件とノンクリスチャン条件の間に差はみられなかった ($t[38]=0.51, n.s.$)。

考察

本研究では、“賛美”に対して聴き手が抱く印象の本研究の目的は、“賛美”の聴取時に、クリスチャンが“賛美”の歌詞に自発的な選択的注意を向けているのかを明らかにすることであった。

本研究の仮説は、“賛美”においては、クリスチャンの歌詞の再生成績はノンクリスチャンに比べて高くなる一方で、童謡・唱歌においては、クリスチャンとノンクリスチャンの歌詞の再生成績は異なるというものであった。

実験の結果、聴取者の違いと音楽の種類は、歌詞の再生成績に相互に影響を及ぼし合っていた。具体的には、“賛美”条件においては、クリスチャンの歌詞の再生成績がノンクリスチャンに比べて高くなった。また、ノンクリスチャンの“賛美”の歌詞の再生成績は、童

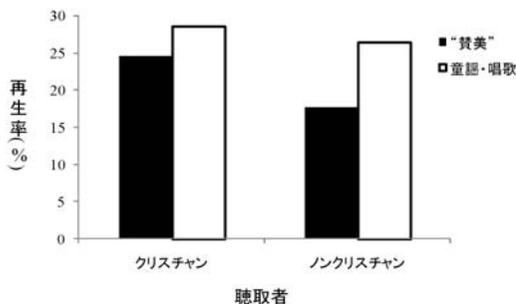


図1. クリスチャンとノンクリスチャンの歌詞の再生率

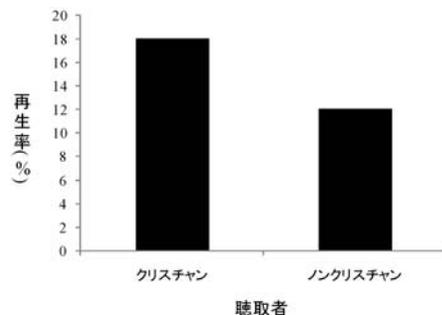


図2. クリスチャンとノンクリスチャンの“賛美”の再生率

謡・唱歌のそれに比べて低くなった。一方、童謡・唱歌の歌詞の再生成績は、クリスチャンとノンクリスチャンとの間で差がみられなかった。この結果は、基本的には、仮説を支持するものであった。実験の結果は、以下のように解釈することができる。

童謡・唱歌の歌詞の再生成績に差がみられなかったことから、単にクリスチャンの記憶能力が高かったわけではないことがわかる。それにも関わらず、クリスチャンとノンクリスチャンとで“賛美”の歌詞の再生成績に差がみられたのは、クリスチャンとノンクリスチャンの、“賛美”の歌詞に対する処理の違いが影響していると考えることができる。特に、記憶の符号化の段階における処理の深さの違いが、両者の成績の差に現われたのであろう。いわゆる処理水準説 (levels of processing theory) によると、情報を意味的・概念的に処理する方が、音韻的に処理するよりも深く、記憶成績が良くなるという (Craik & Lockhart, 1972; 藤田, 2006; 吉野, 2002)。今回の結果を処理水準説に照らして考えてみると、クリスチャンは歌詞が“賛美”の本質的な要素であると理解しており、そのために“賛美”を聴取した際に、その歌詞に自発的な選択的注意を向けていたのであろう。従って、クリスチャンは、歌詞を音韻的に処理するのではなく、意味的な処理まで行うことができたと考えられる。一方、ノンクリスチャンは、“賛美”の歌詞をとりたてて重視していなかったために、“賛美”の歌詞に対して、単に音韻的な処理のみを行っていたと考えられる。こうしたことが理由で、クリスチャンとノンクリスチャンとでは、“賛美”の歌詞の再生成績に差が生じたのであろう。

さらに、クリスチャンがノンクリスチャンに比べて、より積極的に歌詞の意味的な処理を行うことができたのは、“賛美”の歌詞に、「御霊」や「聖霊」、あるいは「救い主」といった、

一般的には使用されることの少ない言葉が多く含まれていることとも関係していると考えられる。クリスチャンにとっては、このような言葉は馴染みの深いものであり、“賛美”の歌詞の意味を正確に理解し、それを記憶することは容易であったと考えられる。しかし、ノンクリスチャンはこのような言葉に馴染みがなく、その意味を理解することが困難であると考えられる。そのため、こうした歌詞を聞いても、クリスチャンのように意味的処理まで行うことが困難であり、結果として音韻的な処理しかできなかつたのであろう。これらのことから、聴取情報の記憶能力に差がなく、従って童謡や唱歌の記憶成績は等しいにも関わらず、“賛美”の記憶成績には違いが生じたと考えられる。

あるいは、“賛美”という特定のジャンルの音楽に対して、クリスチャンとノンクリスチャンとでは親近性に違いがあるということも、記憶成績に影響を与えているのかもしれない。すなわち、クリスチャンは日常的に教会に通って“賛美”に触れている一方で、ノンクリスチャンは、クリスチャンと比べると、ほとんど、あるいはまったく“賛美”の知識はない。従って、同じ“賛美”という音楽を聴取しても、そこに感じる“違和感”はおのずと異なってくると考えられる。そうした違和感もまた、両者の記憶成績の違いの一因になっているかもしれない。

本研究では、明示的に歌詞を記憶するという教示は与えていなかった。従って、1曲目は純粋に偶発学習の結果を表しているといえる。この1曲目の再生成績はクリスチャンとノンクリスチャンとで違いがなかった。このことは、これまで述べてきたことと必ずしも一致しない。今回の結果のみからこの理由を特定することは難しい。本研究で扱った歌詞というものが、ホルンの音色のような非言語的情報ではなく、言語的情報であることが要因であるかもしれないし、1曲目

では、両者とも歌詞以外の様々な要素に注意を向けていたのかもしれない。あるいは、1曲目でも差はあったものの、誤差とみなされる程度の差であった可能性も考えられる。いずれにしても、この点については今後のさらなる検討が必要であろう。

本研究の結果、クリスチャンは“賛美”の歌詞に対して、自発的な選択的注意を向けていることが明らかになった。後藤(2015)は、“賛美”の聴取印象の構造を明らかにし、その各因子に対するクリスチャンとノンクリスチャンの評価が同じではない可能性を示している。これらを総合的に考えると、クリスチャンとノンクリスチャンとでは、“賛美”という音楽に対して、注意の向け方や記憶の仕方が異なり、その結果“賛美”に抱く印象も違っていると結論づけることができるであろう。このことは、認知リソースの配分の観点からも説明できるかもしれない。認知リソースとは、認知的な課題の処理を遂行する際に必要とされる脳の容量のことであり、その容量には限界があることが知られている(高野, 1995)。ノンクリスチャンは、異質な音楽である“賛美”を聴取した際に、クリスチャンよりも多くの認知リソースを割かなければならず、そのことが注意や記憶、そして印象評価にも影響を与えたのであろう。

今回の実験では、クリスチャンが“賛美”の聴取時に、歌詞に自発的な注意を向けているのかを明らかにすることを目的としていた。今後は、歌詞以外の要素においても、クリスチャンとノンクリスチャンの違いがみられるのかを検討することが重要であろう。また、歌い手や演奏者が、“賛美”を歌ったり演奏したりする際に、聴取者が“賛美”に抱いた印象と同じような印象を抱くのかについても検討を行う必要があると考えられる。

謝辞

本研究は、吉田真実(北星学園大学文学部心理・応用コミュニケーション学科2013年3月卒業)の多大なる協力を得た。記して謝意を示す。

注

- 1 このような手続きを取ることによって、2曲目以降の歌詞については、特に明示的に教示を与えなくても意図的に学習してしまう可能性が高く、厳密には、両者の記憶成績を単純に比較することは難しい。しかしながら、本研究の一義的な目的が“賛美”の歌詞に対する自発的な選択的注意を調べることにあり、童謡・唱歌に対するそれはあくまでも比較対象である。したがって、1曲目は全て“賛美”に固定することとした。

引用文献

- Craik, F.I.M., & Lockhart, R.S. (1972). Levels of processing: A framework for memory research. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 11, pp. 671-684.
- 藤田哲也(2006). 学習時のリスト構造の違いと処理水準効果:連想手がかり再生による検討. *法政大学文学部紀要*, 52, pp. 73-82.
- 後藤靖宏(2008). メロディのリズムおよび音高抽出能力と音楽熟達度の関係. *日本教育心理学会総会発表論文集*, 50, p. 200.
- 後藤靖宏(2010). 金管3重奏旋律に対するホルン奏者の自発的な選択的聴取. *北星学園大学文学部北星論集*, 47(2), pp. 21-31.
- 後藤靖宏(2015). “賛美”の音楽心理学的考察:クリスチャンとノンクリスチャンとでは抱く印象は異なるのか?. *北星学園大学文学部北星論集*, 52(2), pp. 19-28.
- 三谷和司(1994). *賛美の回復*. 東京:キリスト新聞社.
- 水戸博道・大浦容子(1996). 異なるジャンルの旋律の記憶:音楽聴取経験の効果. *新潟大学教育学部紀要*, 38, pp. 143-147.
- 大浦容子・波多野諠余夫(1986). 旋律記憶における被験者の年齢と音楽経験の効果. *日本教育心理学会総会第28回発表論文集*, pp. 784-785.

- 大浦容子・波多野誼余夫 (1994). 異なる様式の旋律記憶に及ぼす年齢と音楽経験の効果. *日本教育心理学会総会第36回発表論文集*, p. 389.
- 高野陽太郎 (1995). *記憶*. 東京:東京大学出版会.
- 横坂康彦 (1993). *教会音楽史と賛美歌学*. 東京:日本基督教団出版局.
- 吉野 巖 (2002). メロディ聴取時の注意が記憶に与える影響. *日本音楽知覚認知学会平成14年度秋期研究発表会資料*, 14 (2), pp. 39-46.